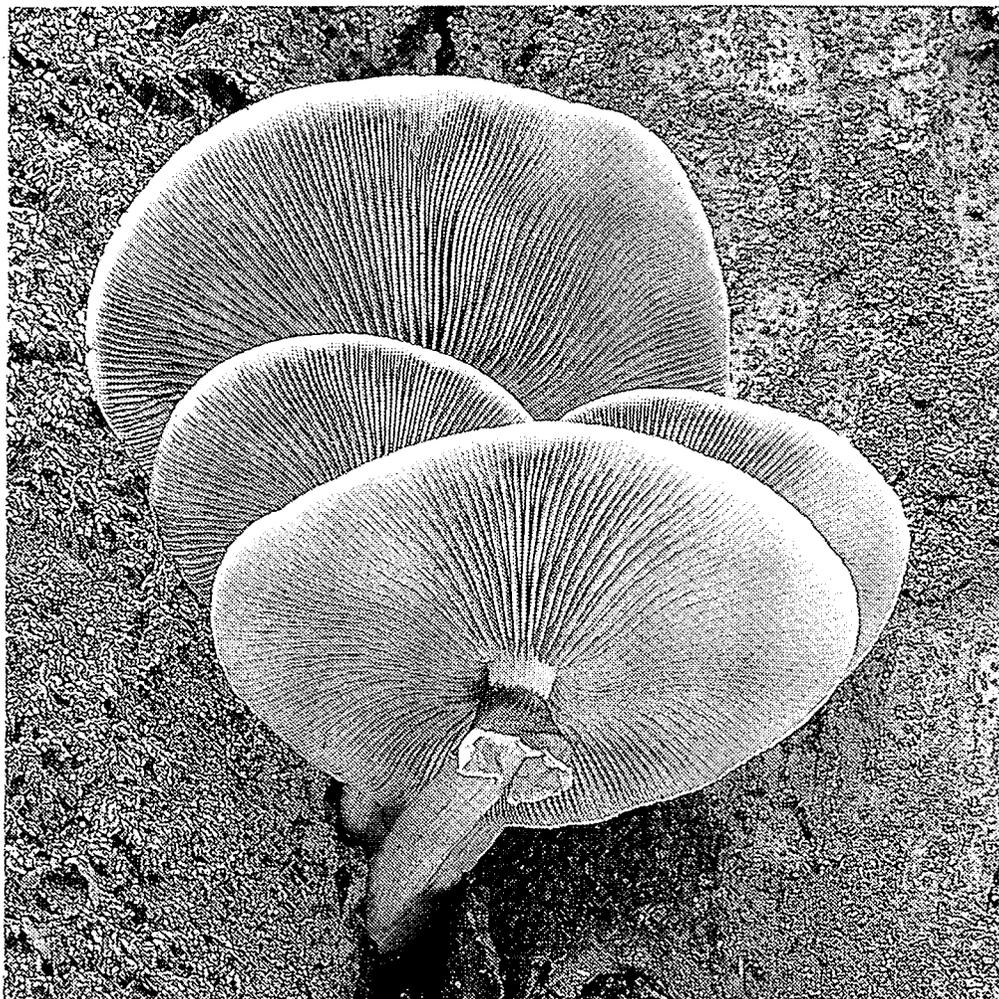


# 関西菌類談話会会報

1991年12月 No.10



## 目 次

表紙 [ヤナギマツタケ] 撮影	森本 繁雄	1
今関先生と私	本郷 次雄	2
大山採集会に参加して	沖野登美雄	3
きのこのひだ	深田 善樹	4
談話会員の採集した珍しいきのこ (3)	横山 和生	6
91年度活動の記録 (上半期)		8
きのこ質問箱		11
表紙によせて、投稿案内等		12



## 今 関 先 生 と 私

本 郷 次 雄

私をもっとも尊敬し、師とも仰いでいた偉大な菌学者、今関六也先生は、去る7月24日午前9時13分、心不全のためお亡くなりになりました。ご病気で入院しておられたことは噂で聞いていたのですが、お見舞いに行くのがついおくれていて、とうとうお目にかかれないうまま永遠のお別れとなってしまうしました。27日の告別式の日には「神奈川きのこの会」の鳥取県大山での採集会と重なり、私はその際の講演を依頼されておりましたので、どうしても採集会に参加せねばならなかったのです。先生は「きのこの会」の顧問で、今回の採集会は実は先生の強いご意見により計画されたとのことでした。したがって、これに一人でも多く参加することを、先生はきっとお喜びになっていたことと思っております。7月31日、私は葉山のご邸宅をお伺いしてご仏前に詣で、奥様をはじめご遺族の方々におくやみの言葉を申し上げてまいりました。祭壇中央にはお孫さんの描かれた先生の肖像画が遺影として飾られ、また皇太后さまからのお見舞い品も供えられておりました。

さて、私が先生のお名前を初めて知ったのは、もう50年ほど前の学生のころで、広島市の書店で買い求めた「原色きのこ」(1942 三省堂)という本からでした。この本はポケット版、104ページの小冊子とはいえ、太平洋戦争中の出版物としては珍しく72ページの原色図版が含まれておりました。そして従来の手引き書にはなかったような種類、ことにハラタケ類が多数載せられておりました。当時先生は東京(現国立)科学博物館におられたことと思います。終戦後、私がきのこ学に踏み入るようになって、野山を歩き回るとき、絶えずこの書をポケットにしのばせておりました。

先生に初めてお会いしたのはたしか昭和25年ごろで、以来40年余りのおつきあいでした。当時先生はすでに目黒の林業試験場に移っておられ、何度もここを訪れていろいろと教えを請い、しばしば近くの官舎に泊めてもらいました。そんなわけで奥様ともご子息様たちとも親しくしていただきました。当時開かれていた東京菌類談話会にもときどき連れて行って下さったので、菌学の新しい知識に触れることができ、また多くの菌学

者とも知りあう機会が与えられました。浅川実験林も何度か訪れました。先生は相手がいかなる人であろうと、わけへだてなく付き合ったださる方でしたので、青二才の私はあつかましく何度も先生を訪ねました。そのころはまだ新幹線はなく、東京への往復はいつも夜行急行を利用しました。

昭和30年ごろになって、大阪の保育社から菌類図鑑を出す話が持ち上がり、今関先生と私がい協力して執筆することになりました。きのこ類の研究を始めて7、8年しか経たない私でしたが、大胆にもこれを引き受けたわけです。私はこの書において、日本では初めて、画期的なSinger(1951)のハラタケ目の分類体系を紹介し、昭和32年(1957)秋出版されました。今から思えば冷汗の出るような出来の図鑑でしたが、意外にも世に迎えられて、その後全国に多くの同好の士を生み、8年後にはさらに続編を出すことができました。しかし先生は10数年前から、お会いするたびに、「この図鑑も年を経て内容的に古くなってきたので、一日も早く全面的に書き直したい。」ともらしておられました。そしてついに、正編が出て30年を経過した昭和62年(1987)に新菌類図鑑第1巻を、さらに平成元年(1989)に第2巻を出し、ほぼ同時に山と溪谷社の「日本のきのこ」(1988)を出すことができました。後者では編著者に大谷吉雄先生にも加わっていただきました。これらの著作において、今関先生は80才をとくに過ぎておられましたが、文字通り心血を注いで、複雑きわまりないヒダナンタケ目をまとめられました。先生の日ごろの念願を達成されたわけです。先生からのお便りにはいつも「頭はぼけているし、根気もなくなっている。」と書かれていました。

先生は色紙などによく“Tune ni Kin to tomoni ari”とか、「恒在與菌」とかなかなかの達筆で書かれましたが、このことばは永年にわたる先生の思想の発展の結果生まれたもので、ご生前からのご希望で戒名にもそのまま取り入れられ、「六合院恒在與菌居士」とされました。今後も永く後輩をご指導ご鞭撻願いたかったのですが、米寿を目前にして急に逝去されたことは悔やまれてなりません。どうか安らかにお眠り下さいませ。

(〒520-21 大津市大萱3-3-7)

# 大山採集会に参加して

沖野 登美雄

私がきのご類に興味を持ってから約35年余りになります。

私がきのごを勉強し始めた頃は、図鑑と言っても川村清一著原色版日本菌類図説と三省堂発行日本隠花植物図鑑ぐらいしかありませんでした。それから数年後に本郷次雄先生の紹介で日本菌学会会員となり、この関西菌類談話会に入会をさせて頂きました。

四国にはきのごの会がないために、地元の高等植物研究会に混じって『井の中のかわず大海を知らず』でやって来ました。

1986年9月の日本菌学会大山採集会の時初めて、恐る恐る参加させて頂きました。

なぜ恐る恐るかと申しますと、菌学会は専門家の多い集まりであり、自分の勉強不足の不安、学会雰囲気不安等があったからです。

その時は、5班に別れて各自が思いの場所に採集に行きました。私は四国地方できのごが豊富に生える林と良く似ている三の沢コースを選びました。

その時は採集したきのごの種類も多く、鑑定会には専門の先生方によって、名前が付けられて行きました。図鑑を見た写真や図と感じの違いや、図鑑等の記載文と実際に見たきのごの現物とが違った物もありました。

恥ずかしい話ですが、自分の標本に付けた名前が間違いであると感じた物があり、心の中で冷や汗をかいていました。

振り返ってみれば、私がきのご類に興味を持ってから長い年月が経ちます。私の人生の如く年ばかり取って来たが、きのごの勉強は進んでいないと痛感しました。

『井の中のかわず大海を知らず』の諺の様に、このような採集会には時間の許すかぎり参加しなくては、と思う様になりました。

その時から4年後の1990年の関西菌類談話会大山採集会に参加させて頂きました。

その時の採集会は、お天気も良く第一日目は榊



水高原まで定期バスを利用したの横手道沿いコースを、第二日目はマイクロバス利用の三の沢コースでの採集を楽しみました。

またこの時は、あの4年前の不安を持っていた採集会参加とは違って、同室の会員の皆さんとの情報交換等をして、私はリラックスした採集会を楽しませて頂きました。

そして今年、私は3回目の大山採集会への参加となりました。

昨年の採集会のときに、役員のどなたかが「きのごは水ものである」と言われましたが、まさしく今年はお天気に恵まれず、このために採集したきのごも昨年より少なく、その点少しの足りない気もしましたが、横山和正先生の標本固定法も見せて頂きました。

また、吉見昭一先生のキノコ展の時の苦労話やスライド写真整理の失敗話も聴かせて頂きました。

夜遅くまで話の花が咲きました。力試しのつもりで、きのごクイズにも参加して、私は大山テレホンカードを頂きました。私のきのご勉強からすると一応満足と感じましたが、世話人から「もっと修行をせよ」とのお言葉による『喝』を入れられました。

私なりに勉強させて頂いたと感じる今日この頃であります。

今後も時間の許す限り参加させて頂きたいと思っておりますので宜しくお願いします。

(〒791-11 愛媛県伊予郡砥部町高尾田279)

# きのこの 髷 (ひだ)

深田 善樹

これはキノコに限らず多細胞生物全般に言えることですが、キノコの個々の細胞は、基本的にみな同じ遺伝子をもっています。ところが、キノコを形作っている細胞は表皮や髷、傘など身体各部分で違う形に変化してしまっています。これは細胞が身体の中のある場所に依りて分化を起こすからですが、そのためには各細胞は自分が身体の中のどの部分に位置するのか (位置情報) を知らなければなりません。位置情報の概念は1969年にWolpert<sup>1)</sup>によって提供されました。その理論では、細胞の集団のある一方の端の細胞がある物質を放出し、それが拡散していき、物質を放出している細胞から離れた位置ほどその物質の濃度が薄くなるため、個々の細胞は、自分の位置を物質の濃度から判別できるとしています。それに前後して、数多くのモデルや理論が提出されました<sup>2)</sup>。

その理論の1つに周期的な構造を形成するモデルがあります。細胞で生産される物質Aがあり、細胞はこの物質があると益々この物質を生産するとします。このためAはねずみ算的に量が増えていきます、ところがAが増えると細胞は別の物質Bを生産し、Bは、逆にAとB自身の生産を阻害する働きを持っているとします。この2つの物質は共に組織の中を、インクがにじむように拡散していき、AよりもBのほうが早く拡散するとします。すると、あるところでAが多いとその

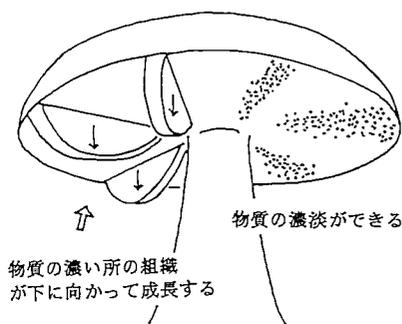


図2

周囲にはBが拡がっていくのでAの生産は抑えられてしまいます。しかし、更に離れた場所ではBの濃度も薄くなるので、Aが生産されます (図1)。これが繰り返されて、Aの濃い所と薄い所が交互に並ぶことになり、周期的なパターンが自動的に形成されます。この考えは1952年にA. M. Turing<sup>3)</sup>によって初めて与えられ、ヒドラの発生に応用されました<sup>4)</sup>。

私はキノコの髷の模様の形成について Turing のアイデアの応用を考えてみました。髷は傘の裏側の表皮が変化してできたもののようなので、そこでキノコは初め傘の裏側はのっぺりとしていて、そこに髷の模様ができていくものと仮定します。キノコの髷は中心から放射状に出ています。これは、円周方向には周期的なパターンになっているという見方ができます。ここに注目して Turing の方法を応用するわけです。それでは動径方向については如何でしょうか。髷は放射状に並んでいるからして、菌糸が放射状に並んでいると考えるのが自然でしょう。キノコの中で、養分や水は菌糸を伝って送られますが、ここの2つの物質もやはり菌糸と平行な方向には拡がり易く、その為、動径方向にはのっぺりとしたパターンになると考えられます。こうして物質の濃淡模様ができ、その後、物質の濃いところが下に向かって成長し、髷を作ると考えるのです (図2)。以上の考えをまとめて、私は図3に示す一組の方程式を立てました。これは Turing の方程式の拡張です。ここでは方程式についての議論は避けませんが、その結果だけを示します。

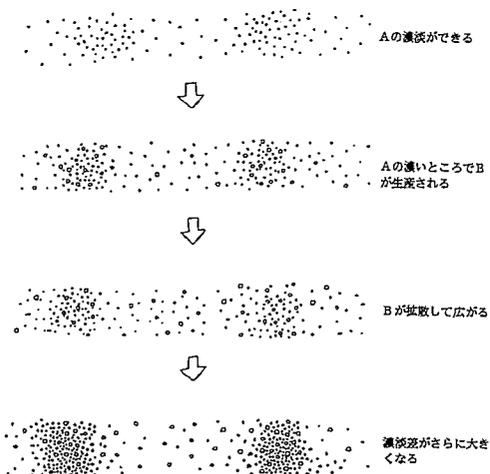


図1 ・はAの濃度。○はBの濃度

まず傘の縁で物質が大気中に放出しない、茎は十分細く、茎では物質の生産は行われず、そのため茎の所で物質が極端に多くなったりしないという条件のもとで解析しますと、物質の拡散し易さや、生産の行われる割合を示すパラメーターが一定の条件を満たしているとき、予想どおりに、方程式の解に不安定性が生じ、初め物質の濃度がほぼ均一であってもしだいに放射状に物質の濃いところと薄いところの模様ができていくことがわかりました。

きのこの鬚には茎から傘の縁まである鬚の他に傘の途中から生じるいわゆる小ひだというものがあります。図4はニガクリタケのものですが、これを見ると、小ひだは茎からの距離によって幾つかのグループに分けられることがわかります、方程式の解にもやはり小ひだは現れます、そして小ひだのグループ数は、物質の拡散し易さ（拡散定数）の、動径方向と円周方向の比率と密接な関係が在ることがわかり、拡散定数の比 $\alpha$ と鬚の本数 $n$ との間には、おおよそで

小ひだが無いとき、  $\alpha > 0.6 n^2$

小ひだのグループが1つのとき

$$0.6 n^2 > \alpha > 0.1 n^2$$

同2つのとき  $0.1 n^2 > \alpha > 0.03 n^2$

……

という関係があることがわかりました。

ここで実際のきのこのことと比較してみることにしたいのですが、実験的に $\alpha$ を求めるのはかなり難しいと思います。ただ、菌糸の方向が良く揃っているとか、一本の菌糸が長い、菌糸が疎ら、( $\alpha$ が大きい)、というときに小ひだが少なくなる傾向にあるといえます。注意すべきは、成菌ではなく、鬚のまだできてない幼菌について調べなければならないことです。面白いことに、菌糸が短いように思える *Russula* でも、小ひだが少ないものがあつたりします、これは球状菌糸がひだの形成には係っていないということだと思えます。

$$\frac{\partial f}{\partial t} = f - a h + D \left( \frac{\partial^2 f}{\partial r^2} + \frac{1}{r} \frac{\partial f}{\partial r} - \frac{1}{\alpha r^2} \frac{\partial^2 f}{\partial \theta^2} \right)$$

$$\frac{\partial h}{\partial t} = f - b h + D \left( \frac{\partial^2 h}{\partial r^2} + \frac{1}{r} \frac{\partial h}{\partial r} - \frac{1}{\alpha r^2} \frac{\partial^2 h}{\partial \theta^2} \right)$$

$f$  ; 物質Aの濃度

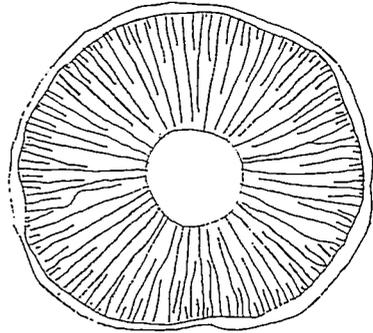
$h$  ; 物質Bの濃度

$D$  ; 動径方向の拡散係数

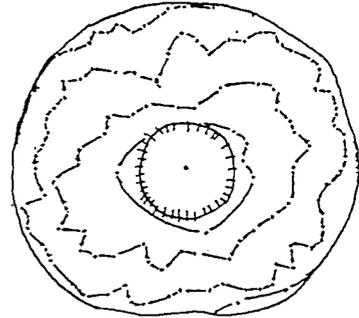
$\alpha$  ; 拡散係数の動径方向と円周方向の比

$a, b$  ; 定数 (細胞の働きを示す)

図3



(a. 鬚のパターン。直径は約1.5 cm。)



(b. 小鬚の端をプロットし、線で結んでグループ分けした。)

図4

イグチやコウタケの仲間ではどうか？私は鬚の形成層の中で菌糸が全く方向性を持たないか、あるいは形成層の面に菌糸が垂直に立つような並び方をしているのだと思います。管孔になるのか針になるのかの違いは、物質の濃度がもっと高くなったときの細胞の働きの違いに依るのでしょうか (数学的には非線形性が効いてくると言います)。

生物の発生における細胞の分化の問題は物理学の応用によって最近大きな発展が見られました (まだまだ原始的な段階と言えます)。キノコは特に、個体の概念が明確でない、環境の影響を受けやすい、等の性質からも非常に面白い研究対象ではないかと思いますがどうでしょう。

(〒558 大阪市住吉区我孫子4-10-12 広瀬文化104号)

#### 参考文献

- 1) 柴谷篤弘 発生現象の細胞社会学 P. 75~ 及び P. 10 ~ 講談社サイエンティフィック.
- 2) L. Wolpert, J. Theoret. Biol., 25, 1 (1969)
- 3) A. M. Turing, Philos. Trans. Roy. Soc. London, Ser. B, 237, 37 (1952)
- 4) H. ハーケン 協同現象の数理 P. 344~ (牧島邦夫, 小森尚志 訳) 東海大学出版会





# 1991年度 活動の記録 (上半期)

## 第283回例会 分類学講座 (第16回)

日時: 1991年5月19日 (日) 32名参加  
場所: 滋賀大学教育学部大会議室  
演題: ホウキタケ属の分類について  
講演者: 横山和正氏 (滋賀大学)

ホウキタケ属の分類について、入門的な事柄が概説され、その後スライドでホウキタケ属の数種が紹介された。

その内容は次のとおりであった。

1. ホウキタケ属の分類は大まかに孢子で分類されている。
2. 未記載のものが多い。
3. 採取・観察の注意点など。
4. 液浸標本の作り方 (ホルマリン25:アルコール5:水70)。
5. ササナバの生態的性質等々。

その後、活発な質疑応答がなされた。

(藤田博美)

## 第284回例会 シンポジウム

日時: 1991年6月22日 (土) 61名参加  
場所: 京都府立勤労会館  
テーマ: 栽培キノコの現状と将来展望

栽培きのこ、特に、ヒラタケ、マッシュルーム、ブナシメジ、シイタケの栽培に関する現状とこれからの展望について、衣田雅人氏、森本肇氏、日下部克彦氏、山内政明氏の講演があった。一人当たりの講演時間は30分 (25分講演、5分質疑応答) であった。

シンポジウム開始は午後2時であったが、午後1時30分頃から、参加者が続々と集まり、開始前には60名近くになり、会場はほぼ満席になった。参加者の多くは大阪府、京都府、滋賀県、兵庫県、奈良県の関西地方からであったが、金沢や名古屋からの参加もあった。これは栽培きのこに関心を持っている人が多いことを示している。

定刻通りに始まったが、30分では時間が足りない講演もあり、4題の発表が終わったのは、午後4時40分過ぎであった。そのあと、午後5時5分までの短い間であったが、総合討論が行われた。

総合討論の中で、種菌、栽培中の病害、菌床のリサイクルの問題等について質問があった。そのなかでも、栽培中のきのこの病害に対する農薬の使用が話題になった。シイタケの菌床栽培やマッシュルーム栽培のように機械化を行い、環境条件を

コントロールすることによって、生産効率をあげようとする、農薬を使わないと生産量が落ちることが多いとのことであった。これに関して、消費者の立場から、環境面からいろいろ意見が出されたが、時間不足で十分討論できなかったのは残念であった。

栽培きのこの将来は新しい栽培きのこの開発や栽培の機械化やほだぎを使わないシイタケの人工栽培等明るい面も多いと思えるが、農薬の使用が多くなる点等の問題も無視できないようである。

(下野義人)

## 第285回例会 三井寺裏山観察・採集会

日時: 1991年7月7日 (日) 曇り、49名参加  
場所: 大津市三井寺裏山 (シイ・カン林)

大津市役所前に午前10時30分に集まり、本郷氏の挨拶の後、太田、橋屋、大西、横山各氏の案内で歴史博物館の裏から法明院までのシイ、カン林を採集した。

きのこの種類はあまり多くはなかったが、法明院の竹林にサンコタケが多数発生していた。昼食後、法明院の庭にきのこをならべ、同定を行い、午後1時30分に解散した。

(横山和正)

## 採集品リスト

- 1 *Laccaria vinaceoavellanea* カレバキツネタケ
  - 2 *Omphalina epichysium* ヒダサカズキタケ
  - 3 *Marasmiellus nigripes* アシグロホウライタケ
  - 4 *Micromphale pacificus* ?
- サカズキホウライタケ属
- 5 *Oudemansiella pudens* ビロードツエタケ
  - 6 *Marasmius pulcherripes* ハナオチバタケ
  - 7 *Marasmius maximus* オオホウライタケ
  - 8 *Cyptotrampa asprata* ダイダイガサ
  - 9 *Amanita longistriata* タマゴテングタケモドキ
  - 10 *Amanita volvata* フクロツルタケ
  - 11 *Amanita spissacea* ヘビキノコモドキ
  - 12 *Leucocoprinus otsuensis* ミイノヒガサタケ
  - 13 *Agaricus sp.* ハラタケ属
  - 14 *Coprinus disseminatus* イヌセンボンタケ
  - 15 *Psathyrella candolliana* イタチタケ
  - 16 *Psathyrella sp.* ナヨタケ属
  - 17 *Naematoloma fasciculare* ニガクリタケ
  - 18 *Pholiota sp.* スギタケ属
  - 19 *Inocybe lutea* キイロアセタケ
  - 20 *Inocybe asterospora* カブラアセタケ
  - 21 *Inocybe oblectabilis* アセタケ属

22	<i>Crepidotus</i> sp.	チャヒラタケ属
23	<i>Strobilomyces confusus</i>	オニイグチモドキ
24	<i>Austroboletus fusisporus</i>	ヤンチャイグチ
25	<i>Phylloporus bellus</i> var. <i>cyanescens</i>	イロガワリキヒダタケ
26	<i>Xerocomus chrysenteron</i>	キッコウアワタケ
27	<i>Xerocomus</i> sp.	アワタケ属
28	<i>Boletus fraternus</i>	コウジタケ
29	<i>Boletus queletii</i> ?	ヤマドリタケ属
30	<i>Tylophilus nigropurpureus</i>	クロニガイグチ
31	<i>Tylophilus otsuensis</i>	コビチャニガイグチ
32	<i>Russula eburneoareolata</i>	ツギハギハツ
33	<i>Russula mariae</i>	ニオイコベニタケ
34	<i>Russula castanopsidis</i>	カレバハツ
35	<i>Russula</i> sp.	ペニタケ属
36	<i>Lactarius gracilis</i>	アソボソチチタケ
37	<i>Cantharellus minor</i>	ヒナアンズタケ
38	<i>Clavulina cristata</i>	カレエダタケ
39	<i>Clavulina amethystinoides</i>	ムラサキホウキタケモドキ
40	<i>Clavicornia pyxidata</i>	フサヒメホウキタケ
41	<i>Polyporus alveolarius</i>	ハチノスタケ
42	<i>Polyporus arcularius</i>	アミスギタケ
43	<i>Microporus flabelliformis</i>	ウチワタケ
44	<i>Coltricia cinnamomea</i>	ニッケイタケ
45	<i>Coriolus versicolor</i>	カワラタケ
46	<i>Daedaleopsis styracina</i>	エゴノキタケ
47	<i>Truncospora ochroleuca</i>	ウズラタケ
48	<i>Cyclomyces fuscus</i>	ワヒダタケ
49	<i>Scleroderma</i> sp.	ニセショウロ属
50	<i>Calostoma japonicum</i>	クチベニタケ
51	<i>Geastrum triplex</i>	エリマキツチグリ
52	<i>Geastrum mirabile</i>	ヒナツチガキ
53	<i>Calvatia craniiformis</i>	ノウタケ
54	<i>Pseudocolus schellenbergiae</i>	サンコタケ
55	<i>Tremella iduensis</i>	シロキクラゲ属
56	<i>Bisporella citrina</i>	ビョウタケ
57	<i>Galiella celebica</i>	オオゴムタケ
58	<i>Isaria farinosa</i> ?	コナサナギタケ ?

採集品リスト

1	<i>Lentinus lepideus</i>	マツオウジ
2	<i>Armillariella tabescens</i>	ナラタケモドキ
3	<i>Marasmiellus candidus</i> ?	シロホウライタケ ?
4	<i>Cyrtotrama asprata</i>	ダイダイガサ
5	<i>Amanita vaginata</i> var. <i>vaginata</i>	ツルタケ
6	<i>Amanita vaginata</i> var. <i>fulva</i>	カバイロツルタケ
7	<i>Amanita hemibapha</i> subsp. <i>javanica</i>	キタマゴタケ
8	<i>Amanita longistriata</i>	タマゴテングタケモドキ
9	<i>Amanita volvata</i>	フクロツルタケ
10	<i>Amanita spissacea</i>	ヘビキノコモドキ
11	<i>Amanita alboflavescens</i>	キウロコテングタケ
12	<i>Crepidotus mollis</i>	チャヒラタケ
13	<i>Gyroporus cyanescens</i>	アイゾメイグチ
14	<i>Russula densifolia</i>	クロハツモドキ
15	<i>Russula foetens</i>	クサハツ
16	<i>Russula cyanoxantha</i>	カワリハツ
17	<i>Russula virescens</i>	アイタケ
18	<i>Russula rosacea</i>	ヤブレベニタケ
19	<i>Russula</i> sp.	ペニタケ属
20	<i>Lactarius piperatus</i>	ツチカブリ
21	<i>Clavulina cristata</i>	カレエダタケ
22	<i>Stereum gausapatum</i>	チウロコタケ
23	<i>Xylobolus spectabilis</i>	モミジウロコタケ
24	<i>Polyporus alveolarius</i>	ハチノスタケ
25	<i>Polyporus arcularius</i>	アミスギタケ
26	<i>Microporus vernicipes</i>	ツヤウチワタケ
27	<i>Ganoderma lucidum</i>	マンネンタケ
28	<i>Elfvigina applanata</i>	コフキササルノコシカケ
29	<i>Onnia vallata</i>	アズマタケ
30	<i>Guepinia spathularia</i>	ツノマタタケ
31	<i>Cordyceps sobolifera</i>	セミタケ
32	<i>Isaria atypicola</i>	クモタケ

第287回例会 大山観察・採集会

日 時：1991年8月2日(金)～5日(月)  
雨，53名参加

場 所：鳥取県大山(大山寺～三の沢)  
(主にブナ・ミズナラ林)

第286回例会 檀原神宮観察・採集会

日 時：1991年7月28日(日)晴，36名参加  
場 所：檀原市檀原神宮境内(シイ・カン林)

採集会には奈良，大阪，京都，滋賀，愛知の5府県から36名が参加し，以下のリストのように32種のきのこを採集しました。今回の採集会も乾燥が続く，きのこの種類や発生量が少なかったのではないかと思います。今年あらたに採集されたきのこは，ツルタケ，キタマゴタケ，タマゴテングタケモドキ，フクロツルタケ，カレエダタケ，セミタケなど17種でした。(衣田雅人)

とかく，ぎすぎすした人間関係の中で日々を送らねばならない私たちにとって，きのこが好きということだけを接点にした談話会の集まりは，ほのぼのとした暖かさや安らぎを感じます。今年の大山採集会もこの様な雰囲気の中で楽しいひとときを過ごすことができました。

残念なことに，今年の大山は終始雨にたたられ，日程の変更もやむを得ない状態でした。それでも，きのこ採りの猛者たちのこと，予想に反しての不作にもかかわらず沢山のきのこが同定会会場にずらりと並んだのにはさすがと思いました。

雨による日程変更のための欲求不満解消にと，

ひんしゅくを買うことを覚悟で世話人一同汗をたらしてキノコクイズなるものを考え、司会者の橋屋氏の熱演もあって、難問奇問に沸いたことだけは確かでした。  
(佐々木久雄)

採集品リスト

- 1 *Pleurotus ostreatus* ヒラタケ
- 2 *Pleurotus pulmonarius* ウスヒラタケ
- 3 *Lentinus lepideus* マツオウジ
- 4 *Hygrophorus* sp. ヌメリガサ属
- 5 *Camarophyllus virgineus*? オトメノカサ?
- 6 *Laccaria amethystea* ウラムラサキ
- 7 *Laccaria vinaceoavellanea* カレバキツネタケ
- 8 *Clitocybe* sp. カヤタケ属
- 9 *Tricholomopsis rutilans* サマツモドキ
- 10 *Tricholoma saponaceum* ミネシメジ
- 11 *Tricholoma* sp. キシメジ属
- 12 *Armillariella tabescens* ナラタケモドキ
- 13 *Collybia dryophila* モリノカレバタケ
- 14 *Collybia peronata* ワサビカレバタケ
- 15 *Collybia* sp. モリノカレバタケ属
- 16 *Oudemansiella radicata* ツエタケ
- 17 *Oudemansiella platyphylla* ヒロヒダタケ
- 18 *Marasmius pulcherripes*? ハナオチバタケ?
- 19 *Marasmius* sp. ハナオチバタケ近縁種
- 20 *Mycena haematopoda* チシオタケ
- 21 *Mycena epipterygia* ナメアシタケ
- 22 *Mycena pura* サクラタケ
- 23 *Xeromphalina campanella* ヒメカバイロタケ
- 24 *Baeospora myriadophylla* フジイロアマタケ
- 25 *Amanita farinosa* ヒメコナカブリツルタケ
- 26 *Amanita rubrovolvata* ヒメベニテングタケ
- 27 *Amanita rufoferruginea* カバイロコナテングタケ
- 28 *Amanita ceciliae* テングツルタケ
- 29 *Amanita vaginata* var. *vaginata* ツルタケ
- 30 *Amanita vaginata* var. *punctata* オオツルタケ
- 31 *Amanita vaginata* var. *fulva* カバイロツルタケ?
- 32 *Amanita longistriata* タマゴテングタケモドキ
- 33 *Amanita subjunquillea* タマゴタケモドキ
- 34 *Amanita virosa* ドクツルタケ
- 35 *Amanita verna* シロタマゴテングタケ  
(KOH で黄変しない)
- 36 *Amanita volvata* フクロツルタケ
- 37 *Amanita abrupta* タマシロオニタケ
- 38 *Amanita* sp. ヘビキノコモドキに近縁
- 39 *Amanita* sp. テングタケ属
- 40 *Pluteus atricapillus* ウラベニガサ
- 41 *Pluteus atromarginata* に近縁 ウラベニガサ属
- 42 *Agaricus* sp. ハラタケ属
- 43 *Lepiota praetervisana* ナカグロヒメカラカサタケ
- 44 *Lepiota* sp. キツネノカラカサ属
- 45 *Coprinus* sp. ヒトヨタケ属

- 46 *Psathyrella candolliana* イタチタケ
- 47 *Pholiota* sp. スギタケ属
- 48 *Inocybe calamistrata* アオアシアセタケ
- 49 *Inocybe* sp. アセタケ属
- 50 *Descolea flavoannulata* キショウゲンジ
- 51 *Cortinarius salor* ムラサキアブラシメジモドキ
- 52 *Cortinarius torvus* ツバムラサキフウセンタケ
- 53 *Cortinarius* sp. フウセンタケ属
- 54 *Galerina* sp. ケコガサタケ属
- 55 *Rhodophyllus quadratus* アカイボガサタケ
- 56 *Strobilomyces strobilaceus* オニイグチ
- 57 *Gyroporus cyanescens* アイゾメイグチ
- 58 *Gyroporus castaneus* クリイロイグチ
- 59 *Phylloporus bellus* キヒダタケ  
(アンモニアで赤褐色)
- 60 *Xerocomus nigromaculatus* クロアザアワタケ
- 61 *Xerocomus* sp. アワタケ属
- 62 *Boletus aokii* ヒメコウジタケ
- 63 *Boletus pulverulentus* イロガワリ
- 64 *Boletus* sp. ヤマドリタケ属
- 65 *Tylopilus vinosobrunneus* ブドウニガイグチ
- 66 *Leccinum hortonii* シワチャヤマイグチ
- 67 *Russula delicata* s.l. 広義のシロハツ
- 68 *Russula rubescens* イロガワリベニタケ
- 69 *Russula foetens* クサハツ
- 70 *Russula laurocerasi*? クサハツモドキ?
- 71 *Russula senis* オキナクサハツ
- 72 *Russula pectinata* クシノハタケ
- 73 *Russula sororia* キチャハツ
- 74 *Russula cyanoxantha* カワリハツ
- 75 *Russula vesca*? チギレハツ?
- 76 *Russula mariae* ニオイコベニタケ
- 77 *Russula emetica* ドクベニタケ
- 78 *Russula* sp. クサハツ近縁種
- 79 *Russula* sp. ベニタケ属(白)
- 80 *Russula* sp. ベニタケ属
- 81 *Lactarius piperatus* ツチカブリ
- 82 *Lactarius glaucescens* アオゾメツチカブリ
- 83 *Lactarius vellereus* ケシロハツ
- 84 *Lactarius volemus* チチタケ
- 85 *Lactarius hygrophoroides* ヒロハチチタケ
- 86 *Lactarius castanopsidis* ヒカゲヒメチチタケ
- 87 *Lactarius quietus* チョウシチチタケ
- 88 *Lactarius* sp. ナマグサチチタケ(仮称)
- 89 *Cantharellus minor* ヒナアンズタケ
- 90 *Cantharellus* sp. アクイロウスタケ近縁種
- 91 *Cantharellus* sp. アンズタケ属
- 92 *Clavulinopsis helvola* キソウメンタケ
- 93 *Pterula multifida* フサタケ
- 94 *Clavulina cristata* カレエダタケ
- 95 *Clavulina ornatipes* ケアシホウキタケ
- 96 *Clavicornia pyxidata* フサヒメホウキタケ
- 97 *Ramaria formosa* ハナホウキタケ
- 98 *Ramaria* sp. ホウキタケ属



会報バックナンバーの頒布に  
ついてのお知らせ

会報のバックナンバーが少し残っております。ご  
入り用の方は、下記の表をご覧になり必要なもの  
の品番と部数を、はがきで事務局へおしらせ下さい。  
先着順に現品と請求書をお送りいたします。

関西菌類談話会会報のバックナンバー  
1部 200円 (すべて8ページ)

関西菌類談話会会報	No. 1=品番 1
関西菌類談話会会報	No. 2=品番 2
関西菌類談話会会報	No. 3=品番 3
関西菌類談話会会報	No. 4=品番 4
関西菌類談話会会報	No. 5=品番 5
関西菌類談話会会報	No. 6=品番 6
関西菌類談話会会報	No. 7=品番 7
関西菌類談話会会報	No. 8=品番 8

～皆様の投稿をお待ちしております～

- ◇ かびやきのこに関する記事、図、本誌に関するご意見などをお寄せください。
- ◇ 図は黒インクで、少し大きめ(刷り上がりの約1.5倍)にお書きください。(ボールペンは不可です)
- ◇ 原稿の分量は400字づめ原稿用紙4～5枚程度としますが、1枚でも半分でも結構です。
- ◇ 写真の掲載を希望される方は、編集委員長におたずねください。
- ◇ 原稿宛て先

〒612 京都市伏見区深草西出町25-4

関西菌類談話会会報編集委員長

森本 繁雄

TEL. 075-641-3729

編集委員：山中 勝次、井坪 豊明、田中千尋、  
橋屋 誠、丸西 靖恵、佐々木久雄  
(順不同)

本会会員 今関六也先生は7月26日、ご他界されました。つつしんでおくやみ申し上げます。

表紙によせて

表紙に相応しい写真や絵を募集しているのだが、いっこうに集まって来ない。しかたがないので、今回は編集委員会の方で間に合わせた。

ヤナギマツタケは排気ガスにもめげず、街路樹などにもよくはえる。それで、今度は車の走っている様子をバックに、このきのこの写真を撮りたいと思っている。1988年9月19日京都市円山公園内で撮影。

編集後記

標本の作り方については、昔から様々な方法が試行されてきたと思います。会員の方々の苦勞話や自分の標本作成法など、当編集委員会におよせください。字数は自由です。

また、『標本後』の整理、管理などについても工夫や努力があると思われます。参考になりそうなものがありましたら、お知らせ下さい。また、紙面の都合上、「きのこ西東」などのコーナを次号にまわしましたことをお詫びします。

関西菌類談話会会報 No. 10

1991年12月10日 印刷

1991年12月10日 発行

編 集 関西菌類談話会会報編集委員会

発 行 関西菌類談話会

発行所 関西菌類談話会

事務局 〒618 大阪府三島郡島本町桜井台15-1

大阪府立島本高等学校内

電話 (呼) 075-962-3265

振替 大阪 5-83129

印刷所 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入る